

宮本武藏の精神術

福 來 友 吉

今西洋と東洋との精神的氣分の差別を考へると、先づ大體西洋は科學の國、東洋は哲學の國であります。哲學なる語は西洋風に入つて、本來の面目を捕へるのであつて、一種の自我の本體たる靈の活動を直承して組立てられた佛教及之に類する系統を指して哲學と云ふのであります。五官を通じて得た、感覺經驗を基礎とするものは科學であつて、科學上の知識は有限であります。哲學には能く無限と言ふ言葉が出て來るが、此無限と言ふとは感覺經驗を基礎とする科學的知識で解るものでない。東洋では五官を閉ぢて三昧に入り、自我を超越して遂に差別相を滅して宇宙の靈となるのであります。無限は斯くして解る。無限は無限の外から之を觀察して解るものでない。無限の靈其物と一致するによりて初めて解るものだ。斯くして得たる超越的境界は神祕的なものである。科學者は神祕とは解らぬと言ふことで、消極的のものだと言ふけれども、其は感覺經驗の立場から言ふことで、三昧經驗より言へば神祕境は積極的のものである。東洋の哲人は五官の活用を中止し、自我超越の神祕境を親驗して居るのである。西洋のは

顯微鏡、コンパス、銜等を以て測量する。測量出来るもの丈を存在と許し、測量出来ざるものは「無い」と言ふ。故に科學は「存在す」と云へばすぐ其の位置を問ふけれど、東洋では位置は問はない。例へば自我に付きて唯「存在す」と自證する丈で、其の位置などを問はぬ。問ふたとて、時空超越で答へ能はざるものである。

然るに日本人は如何と言ふに、元來日本人は萬事實際を重んずる民族であります。「神ながらことあげせぬ國」といふて議論より實際を尊び思惟考察よりは感覺的で直截簡明な氣分が優れてをると思ふ。かく考ふれば日本人は東洋人でも神祕的でない様であります。神祕思想と云へば世の中を離れて深き山などに入り込み真如の月を楽しみ世の中を俗世界と見做す考であります。神祕と言ふとを斯様に見なす時は、日本人は斯ることは大嫌ひで、どこまでも現實的に活動することを好んで居る。廻り遠い煩瑣なる思想を嫌つて直截簡明を尊ぶ。故に日本には古代にも哲學と稱すべきものは殆どありません。弘法大師を除きては日本にて大哲學者が無いといつて宜しい。文學も大文學は一もなくゲーテやシエクスピアの如き人は一人も出ない。俳句は丁度線香花火の様なものでありますが、先づ斯んなものが日本人の氣質を能く代表して居る。かく文學哲學に於て貧弱であることは、日本人の萬事實際簡明を尊ぶ主義より出づるものであつて、大文學や大哲學は皆外國から輸入するものであります。かく外國から思想を取り入れるに際しても、實際と直截簡明とが中軸となつて之を國民性と同化して仕舞ひます。支那から儒教印度

から佛教を取り入れて之をすぐ實際化して仕舞ふ。禪は就中思想即行動で日本人の氣質に最適したものであります。此の實地的直截簡明が根底となり、之に儒佛二教が加はつて大義親を滅ぼすと云ふ一種の國民性が生じ、之を實行するに禪宗的なる神祕的修養を以てし、茲に武士道なるものを養成した様に思はれます。

武士道は實行を重んじ、大義名分を行ふに神祕的修養を以つてするものである。忠義は武士道の要素であるが、其ばかりでは武士道にならない。其を實行するに、千練百磨の修養から來る精神力を以てする時、其處に武士道の眞面目がある。大石良雄の偉い所は單に忠義の心の固い所丈でない。熱心で而も落ちついた點にあります。どんな事があつても騒がず、泰然として落ち付いて、而して熱誠なる所に大石の尋常ならざる所がある。

大義名分と靈の修養と、簡明直截の實地的活動の三が融合して、武士道が出来る。此等の點は科學では到底知ることは出來ません。この武士道的精神を具體的に表はしたものは劍道であります。

宮本武藏の劍道に於ける精神作用を御話しませう、宮本武藏が劍道の奥義を書いた書物は五輪書であります。此書によると、武藏の劍道が如何なるものであつたかが十分に理解される。尤も擊劍其物の手などは吾等には解らぬが、併し其の擊劍に對する精神の何物たるやは理解され得る。而して其の精神は單に擊劍に必要なものではなくして、眞面目にして意義ある生存を營む爲めに必要なのである。

武藏は幼少の時から劍道に於ける神童であつて、十三歳の時には播州に於て新當流の達人と言はれた有馬喜兵衛なるものと眞劍勝負をやつて彼を打ち殺して了つた。其の時彼は眞劍勝負に心得ふべき一の極意を悟つたのである。其の極意とは自己の生命を無視し、思ひ切つて敵の懷に飛び込むと言ふことである。武藏の晩年の作に、次の如き歌がある。

ふりかざす。大刀の下こそ、地獄なれ。

一足進めさきは極樂。

と言ふのである。武藏は一生の間に六十餘回の眞劍勝負をなし一度たりとも負けたことも無い。此の六十餘回の眞劍勝負は右の極意を基として行はれたものであるが、其の極意を武藏が十三歳にして體得したのであるが、實に神童と言はねばならぬ。武藏先生は又人物を見る鑑識を具へ、之を教導するに臨機應變の才を以てした人である、或る時一人の青年が彼の許に來り、私は親の仇を打ち度いが、劍術を知らないから必勝の手を教へて貰ひ度いと頼んだ。武藏が何時仇打ちをやるのかと云ふと青年は明日打つのだと云ふ。そこで武藏は青年の熱心を見抜き、然らば望み通り必勝の一手を教へてやろうと承諾した。そこでその青年に二刀を持たしめ左の一刀を下げ一刀を翳し、敵に向つて突進する。かくして敵が自己の翳した刀をカチンと打つた瞬間に、右の大刀を以て敵を突くと教へた。かくしてカチンと云ふとすぐ突く練習を一夜の間續けたと云ふ。ところが熱心の功は恐ろしいもので、其の手が非常に熟達した。

武藏は尙青年の心を勵ます爲めに次ぎの如く言ひ聞かせた。明日愈仇を討つと言ふ前に、土手に腰を掛けて足許を見て居れ。若し足許の所に蟻が這ひ出したならば勝つ前兆だと教へた。武藏の與へた斯る注意の中には武藏の所謂精神作用がよく表はれて居ると思ふ。武藏は敵と眞劍の勝負を爲す場合には、有ゆる機會を利用すると言ふ主義の人であつた。彼が兩刀を用ひたのも、脇差を遊ばせて置く必要ないと思つて之を利用したのであります。脇差を徒らに腰に差しておく事の不必要を感じたからであります。

この兩刀を用ふる點が既に積極的で攻撃力に富んだ點である。武藏が一青年を教導するにも、亦有ゆる機會を利用せんとするの氣風を示して居る。即ち蟻の足許に這ひ出るあれば、其を必勝の前兆とするが如きは其である。此は縁起と言ふ様なことであるが、斯ることが眞劍勝負のときなどは大に關係するものと思ひます。蟻は日本國中何處にも出るもので珍らしくないが、之を利用して勝つ前兆なりと教へて青年を勵ます所に武藏一流の精神術が働いて居る。唯其ばかりでない、足許を熱心に見詰めさせるのは、青年の心を沈着にするのに必要な方法である。熱心は大切なことであるが餘り熱心すぎて沈着を失ふ時は過失を生ずる。故に武藏は心を落ち附ける術を教へたのであります。落ち附くのは先づ丹田に力を込める事で、この形式はまた足下に注意するのと大差ありません。併し「精神を沈着にする爲めに足許に注意して居れ」と言ふ様に、抽象的に教へたとて駄目である。斯る生ぬるきことを言はずして、蟻の這ひ出ることを仇討の成就に結び付けて足許に熱心注意させる様にした所は、實に武藏の武藏たる特色で

ある。

次に宮本武藏が佐々木小次郎と岸柳島に於て勝負をした時の精神術に就て述べませう。佐々木小次郎は岩流と言ふ流義を使い、小倉の細川忠興公に指南し、甚だ有名な人である。武藏は小次郎の劔名を聞き此と眞劔勝負をなし度き旨を忠興公に願ひ出でた。忠興公からは御許可がありて、慶長十七年四月十三日、辰の刻に、双方船島に出張して眞劔勝負することに決した。この時宮本武藏は一の關の宿屋に宿つて居りました。辰の刻になると小次郎は時間に遅れない様にと思つて出立したが、武藏は宿屋の主人が促しても寢床から中々起き出でない。かくする中に小次郎より使者が來てもそれでも行かず、二回目の方が來るに及んで床を出で朝飯を食ひ、木を持ち來らしめて之を削つて木刀を作つたと云ひます。丁度豫定の時間より二時間ほど遅れ、巳の刻に近き頃小舟に乗つて出發しました。船中ではカンデンヨリを作り、其を結びて襷を作り、其の上に綿入れを着て岸柳島へ到着しました。小次郎は猩々緋の袖無羽織に染草の立附を着し、三尺に餘る備前長光を横へ堂々たる出で立ちである。小次郎は武藏の到着の遅きを罵りしも武藏は一向知らぬ顔をして居た。小次郎は怒つて長光を抜き放つて鞘を海中に投じて構へて居る。此の時武藏は大聲をあげて「小次郎負けたり」と云ひました。小次郎怒りて「何故に負たるか」と問へば武藏は「勝つならば鞘を海中に投ずるに及ばない」と答へた。小次郎非常に怒り一刀で武藏の眉間に切り付け、同時に武藏も打ち出したるが、其の太刀は小次郎の頭に當りて立所に倒れ、小次郎の太刀

は武藏の鉢巻を切り落した。二の太刀にて小次郎は脇腹の骨を打ち砕かれて絶命し、武藏は袴の裾を三寸ばかり切り落された丈であつた。

武藏と小次郎との試合は此丈であるが、此の試合に武藏の精神術が行はれて居るが、其は三段に見ることが出来る。(一)は所定の時に故意に遅れて出掛けた事、(二)鞘を捨てたに就てすぐ縁起をつけた事(三)氣合ひをかけた事、以上の三であります。武藏は曾て京都に於て吉岡憲法の子の吉岡清十郎を討つた事があります。その弟の吉岡傳七郎は復讐を試みたが之をも討ち、遂に清十郎の子の又七郎なるもの數十人と共に武藏を討たむとした。初め二回は武藏は時刻を遅れて行つたが、最後の數十人と戦ふ時は時刻より非常に早く行き、暗い中から待ち受け、又七郎が夜明けてやつて來たのを迎へて「又七郎待つてゐた」と叫んだと云ふ。この様に武藏は常に人の意表に出づる事を心懸けてゐた様であります。或る人は斯ることを卑怯だと言ひますが、武藏は眞劍勝負は單に腕の技倆丈を競べるのでない。一切の事情を集めて生死を決するのであるとの主義を持するのである。生死に關係なき勝負ならば單に腕丈でよろしからんも、生命を掛けて勝負する時には一切の事情を集めるのは當然であると思ふ。小次郎と勝負に於ても武藏が時刻に遅れて來た。小次郎にして精神修養の出來た人であつたならば、長く待たされても泰然としてをるべきのに、怒つたなどは確かに精神修養が足りなかつたのであります。其の怒ると言ふことが小次郎の負けの第一歩をなすのである。玉突きでも圍碁でも名人と名人と相對する時、一方が怒

れば、其の怒つた方が負けとなるものである。次に(二)の縁起であります。これは一寸考へると甚だつまらぬ事の様に思はれるけれども、真面目な仕事には非常に影響します。平重盛は「時は平治なり、地は平安たり而して我は平氏なり」と言つて兵卒を勵ましたとがある。(三)に小次郎負けたりと云つたのは、確かに一の氣合であります。催眠術に於ける暗示と同様である。敵の虚に乗じて斯る氣合を掛けると其が中々強き働きをなすものである。此も不真面な生ぬるき精神活動の時には餘り利目の無いものであるが真劍な真面目な場合になつて來ると、實に不思議な程働き出すものである。之に對する小次郎は如何と言ふに是非氣合返へしてやらねばならぬのであるが、其をなさずして「何故に負けたるか」と説明を求めたのであるが、斯んなことでは小次郎は益負ける方へ負ける方へと向つて進み居るばかりである。要するに武藏は單に腕の人ではありません。腕に加ふるに精神的修養の優れた人である。而して其の修養は單に擊劍に必要なばかりでない、真劍真面目の人生を送る爲めに必要なものである。劍道に必要な修養は其儘人生に必要な修養で、其が又武士道の根柢となつて居ると信ずる。(完)

